



TITLE:

フィアカントの社會學論(一)(獨逸  
最近の社會學論、六)

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

---

CITATION:

米田, 庄太郎. フィアカントの社會學論(一)(獨逸最近の社會學論、六).  
經濟論叢 1924, 19(2): 149-180

ISSUE DATE:

1924-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128196>

RIGHT:

# 京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 二 號      第 十 九 卷

大正三十三年八月一日發行

## 論 叢

フイアカントの社會學論……………文學博士 米田庄太郎

道德統計論概說……………法學博士 財部 靜治

海運同盟の運賃に對する國家政策……………法學士 小島昌太郎

水戸藩常平倉の運用……………經濟學博士 本庄榮治郎

## 時 論

娛樂稅の重要……………法學博士 神戸 正雄

## 說 苑

英國の自作農創定事業……………法學博士 河田 嗣郎

獨逸レンテン銀行に就て……………法學士 大森 研造

## 雜 錄

國民經濟と世界經濟……………法學博士 財部 靜治

離婚に就て……………經濟學士 岡崎 文規

勞農露國に於ける幣制改革問題……………經濟學士 谷口 吉彦

# 經濟論叢

第十九卷 第二號

(通卷第百拾號)

大正十三年八月發行

## 論叢

### フイアカントの社會學論 (二)

(獨逸最近の社會學論、六)

米田 庄太郎

## 緒言

フイアカント氏は獨逸革命後の共和政府が、大學改良の一手段としてベルリン大學に社會學の教授職を設くるに當つて、其の職に任せられた最初の人で、今日獨逸に於ける最も有名な社會學者の一人である。而して同氏は又ジムメルンの社會學論を受けて、最も早く形式社會學の概念を發達させた人である。フオン・ウイゼ氏の如きは大に同氏の影響を受けたものと思はれる。

それで余は今日の形式社會學の發達上、同氏を最も重要視す可き一人と認め、此處に同氏の社會學論の發達を稍々詳しく考察したいと思ふ。

却說フイアカント氏が始めて其の社會學論を組織的に論述したのは、余の知る處では同氏が千九百九年「社會學月刊雜誌」(Monatschrift für Soziologie)に公にせる論文「經驗的に研究される特殊學としての社會學」(Soziologie als empirisch betriebene Einzelwissenschaft)に於てであると思ふ。されば同氏の社會學論を其の最初の組織的論述に於て學ばんとするには、同論文を考究せねばならぬ。而して其の後同氏の最近の好著作「社會學」(Gesellschaftslehre. Hauptprobleme der Philosophischen Soziologie. 1923)に於ける社會學論に至るまでの發達を考察すれば、夫れによりて同氏の社會學論の發達を、大體上明らかに理解することが出来るのである。

然るに同氏は「ケルン社會學四季雜誌」第一卷第一冊に公にされた論文「形式社會學の考案」(Programm einer formale Soziologie)に於て、形式社會學の始源を論するに當り、千九百八年(即ち「經驗的に研究される特殊學としての社會學」の公にされる前年)に出版された同氏の好著作「文化變動に於ける恒定性」(Die Stetigkeit im Kulturwandel. Eine soziologische Studie. 1908)を挙げ、同書に就て左の如く云はれて居る。

「同書に於ては一切の文化範域の純形式的な一問題、即ち文化財の變動に於ける相對的恒定性

が取扱はれ、又其の説明は文化統一體內に於ける相互作用の一定の仕方求められて居る。而して此の問題及び其の取扱は、兩者共に夫れが關係する文化財の特殊内容から全く切り離されて居るが故に、余輩が形式社會學と稱する學科の範圍中に入るのである。」

右の言葉によりて考へると、フィアカント氏は既に同書に於て或は同書を公にする以前に、形式社會學の概念を立てられて居て、而して夫れに基いて同書を書かれた様にも考へ得られるのであるが、若しそうであるとすると假令同書に於ては、形式社會學の概念がまだ組織的に論述されて居ないにしても、少なくとも夫れは何處かに指示されて居る可き筈である。されば同氏の社會學論の始源を詳しく研究せんとするに當ては、余輩は「經驗的に研究される特殊學としての社會學」よりも以前に遡り、少なくとも「文化變動に於ける恒定性」から始めねばならなくなる。尙ほ同氏は形式社會學の概念の始源一般を論述するに當つて、同氏自身の著作論文では、只「文化變動に於ける恒定性」だけを挙げられて居るのを見ると、同氏自身も同書以前の同氏の著作論文中、形式社會學の概念を説くもののないのを、認められて居ると察することが出来ると思ふ。それで余は此處に同氏の社會學論の始源を論究せんとするに當つて、更に同書に於ける社會學の概念を考察して見たいと思ふ。

併し余は尙ほ夫れに先だち、同氏の最初の好著作、少なくとも同氏の名を學界に知らしめた最初

の著作、千八百九十六年に出版された「自然人民と文化人民」(Naturvölker und Kulturvölker. Ein Beitrag zur Sozialpsychologie. 1896.) に於て、同氏は始めに社會學及び其の方法論に就て如何なる考へを抱いて居たかを調らべて見たいと思ふ。是れ本書に於ては同氏の社會學の概念はまだ甚だ漠然として居るが、しかも其の中に重要な或物が既に認められ、又本書中に論述されたる精神科學の方法論中には、後の同氏の社會學論の幾多の根本思想の芽が発見されると思はれるからである。それで余は本論文を左の數節に分つこととする。

- (一)「自然人民と文化人民」に於ける社會學論に就て、
- (二)「文化變動に於ける恒定性」に於ける形式社會學の概念に就て、
- (三)「經驗的に研究される特殊科學としての社會學」に於ける形式社會學論の最初の組織的論述、

(四)「ケルン社會學四季雜誌」の「形式社會學の考案」に於ける形式社會學論の大成、

- (五)最近著「社會學」(Gesellschaftslehre. Hauptprobleme der philosophischen Soziologie. 1923.) に於ける形式社會學論、

尙ほ同氏が公にされた多數の論文中には、同氏の形式社會學の内容の發達を研究する爲めに有益なるものが多く存し、又「現代の國家と社會」(Staat und Gesellschaft der Gegenwart. 2. Aufl.

1911.)や「權力と支配」(Macht und Herrschaft. 1922.)などの著書もあり、更に其の内容の方面の發達と共に其の方法論の方面の發達を研究する爲めに有益なるもの、例へば Neue Gesamtdarstellungen der Soziologie. (Zeitschrift für Politik. II. Bd. 1909.)や Literaturbericht zur Kultur- und Gesellschaftslehre für die Jahre 1907 und 1908. (Archiv für die Gesamte Psychologie, 1910.)や Die Beziehung als Grundkategorie des soziologischen Denkens. (Archiv für Rechts- und Wirtschaftsphilosophie. Bd. IX, Heft 1 und 2. 1915 und 1910.) などがある。併し此處に、々其等の論文や報告に就て述べる暇はないし、又そうしなくとも以下説述する處によりて同氏の社會學論は充分に理解し得られると信ずる。

## 一 「自然人民と文化人民」に於ける社會學論に就て

此の著作はフイアカント氏の名を學界に知らせた同氏の最初の著作にして、千八百九十六年同氏がまだブラウンシュウィック高等工業學校の私講師をして居る時分に著述されたものである。而して本書は「社會心理學への一貢獻」(Ein Beitrag zur Socialpsychologie)と云ふ副題名を附せられて居ることによりても、余輩の解する意味での社會學上の一著作であることが察知されるのである。余は本書の公にされた翌年米國新約市コロンビア大學の圖書館に於て之を一讀し、大に得

る處があつたので、其の後屢々余の研究の參考に供して居た。又拙著「經濟心理の研究」中の一論文に於て、本書中特に自然人民の心理一般に關する部分の概要を稍々詳しく述べて置いた。尙ほ本書は今日では獨逸でも容易に手に入らないさうで、或留學生は遂に之を購入することが出來ずに歸つたと云はれて居たから、余は此處に本書に於ける社會學論に就ては、特に稍々詳しく述べることとする。

今フイアカント氏は本書中時々社會學とか社會學的とか云ふ語を用ひられて居るが、併し殊に多く用ひられて居るのは、社會心理學及び社會心理學的と云ふ語である。上に述べし如く、先づ本書の副題名は「社會心理學への一貢獻」となつて居る。又緒言中には「第一章に於ては一の歴史的回顧に結び付けて、現代の哲學的世界形像の性質及び社會心理學の諸學說が之れに參加する割前に關する問題が、簡單に約述されて居る」と云はれて居る。而して其の第一章は實に「社會心理學的表象の發達」と題されて居るのである。

併し同氏は社會學の一般的概念や、又社會心理學の一般的概念に就ては、何處にも述べて居ない。隨ふて本書中同氏が社會學と云ひ、又社會心理學と云ふは、如何なる學問を意味するか、更に兩者の如何はどうであるかを、同氏自身の言述によりて明白に學ぶことは出來ない。吾人は只同氏が本書中其等の語を用ひられて居る場合を吟味して、之を推察し得るだけである。而して今



かゝる仕方では本書に於ける同氏の最初の社會學及び社會心理學の一般的概念や、社會學方法論を考究せんとするに當つて、最も有益なる材料を呈供するものは、第一章「社會心理學の表象の發達」であると思ふ。それで余は此處に先づ本章の主要を、余輩の目的から見て特に重要な方面に付て、稍々詳しく述べ、夫れによりて同氏の最初の社會學及び社會心理學の一般的概念、並に社會學方法論を究明して見ようと思ふ。

却說第一章の主旨は、フイアカント氏自身左の如く述べられて居る。「本書は歴史的性質のものにして、主として啓蒙時代の個人主義と夫れからの反轉（是れ今日では至る處に見られるものにして、今や始まりつゝある精神科學の隆興と密接に結合するもの）との對立を中心とするものである。」而して本章は古代、ルネサンス及び啓蒙の個人主義、カントと第十九世紀、現代、哲學的世界形像等の數節に分たれて居る。此處に此等諸節の主要を、余輩の目的から見て特に重要な方面に付て稍々詳しく述べて、以てフイアカント氏が社會學的或は社會心理學的思想と稱するは如何なるものであるかを示し、又其の發達の論述中に同氏の社會學方法論の最初思想が、如何に現はれて居るかを示すこととする。

先づ古代に於ける社會心理學的思想の發達に就て考へるに、古代に於ては個人的自覺及び個性の自由發展はまだ近世に於ける程發達して居なかつた。而して個人が全體に拘束されると云ふこ

とは、或度に於ては古代全體に通ずる根本的一傾向である。但し夫れは古代文化の發達するに伴なふて段々減弱して居ることも亦事實である。而して個人の被拘束性はプラトンの思想に於て、最も著しく現はれて居る。併し實際上では個人はさほど全體に拘束されて居なかつたと思はれる。殊にペリクルの有名なる葬式演説に於ては、個人は全體に對して一の獨立なる要素として、又其獨立性に於て是認されたる要素として現はれて居る。

中世紀に於ては個人主義的見地と社會主義的見地との一の特異な二元主義が、一般に行なはれて居た。大體上實際生活、例へば經濟生活や法律に於ては社會主義が支配し、而して之れに反して哲學及び神學によりて影響されたる理論は、主として個人主義に傾いた。

近世はカントを境界線として、前後の二つの時代に峻別される。先づ物質的なもの或は自然が勢力を振ふか、又は精神的なるものが勢力を振ふかと云ふ點から見て、吾人は第一の時代を自然主義の時代と稱し、第二の時代を理想主義の時代と稱することが出来る。次に個人と全體との關係から考へると、第一の時代に於ては個人主義が支配し、第二の時代に於ては漸次に他の諸思想が勢力を振ふて來て居るのである。

第一の時代即ちルネサンス、殊に啓蒙時代の社會心理學的思想の内容は、古代の夫れと最も鋭き反對を呈する。古代は本能的に社會主義的に考へた。是れ古代にありては、人間の社會的性

質に關する原本的感情は、何等之れに對立する反省によりて壓迫されず、又公的生活に於ける個人の現實的參加は、何等之れに對抗する政治的制度によりて壓縮されなかつたからである。然るに近世にありては、カントに至るまでは、人間の社會的性質に關する本能的感情は、其の感情を對象とする哲學的反省に於て現はれたる、又其の感情の勢力に反抗する幾多の障礙によりて、少しの例外を除けば、全然壓縮され根絶された。而して其等の障礙の或物は理論的なもの、又或物は實際的なものである。理論的障礙は本質的に三種に分たれる。(1) 主知主義、(2) 實體的思惟法、(3) 自然科学に於ける力學的(器械學的)諸學科の優勢なることである。而して實際的障礙の主要なるものは、(1) 個人の倫理的及び精神的深化と、夫れより生起する處の、個性を強大ならしめて之を大衆より別離せようとする、偏局的に強まれる慾望、(2) 夫れと密接に結合して社會的本能が根絶せられ、社會生活の合理主義的解釋が之れにとり代はれること、(3) 教育の概念が大に發達し、夫れによりて國民が教養ある部分と教養なき部分とに、判然區別されて來たこと、(4) 政治的關係が公的生活に熱誠に參加するを嫌忌せしむるに至れること、(5) 規範的及び目的論的考察法が記述的及び因果的考察法を壓迫して勢力を振ひ、夫れによりて心理的生活の考察に於て、自由なる自己規定及び倫理的自由の概念が非常に重要視され、(但し夫れは人々が此等の理想的要求と現實とを混同することに依る)、而して人間の社會的性質が赤裸々に發現する處の心理的生活の

下層、不隨意的衝動的行動の範域が輕視されたこと等である。

今人間の社會的性質に關する本能的感情を壓縮し、根絶せる其等の理論的及び實際的障礙の共力作用からして、此處に人間社會の嚴刻なる個人主義的及び元子論的把捉或は解釋が必然的に產出されたのであるが、尙ほ主知主義と密接に結び附いて發達せる利己主義即ち無制限的利己心を個人の自然的性質と認める思想は、又社會的共同生活及び文化全體の解釋に適用されて來た。而して此の關係に於て吾人は二つの相異なる思潮を區別することが出来る。一は個人の利己的利益と全體の利益との原本的調和を主張し、かくて全體の利益を單に利己的個人利益の總計と見るもの、二は各個人に對するよりは社會及び文化生活全體に對して、一層著しき利己的性質を認め、かくて個人を社會よりもより高き水準に置き、而して個人は只其の劣惡なる方面のみを以て、文化生活に入ると解するものである。前者は殊に經濟學に於て發達せるものにして、後者は殊に悲觀的文化觀に於て著しく現はれたるものである。而して啓蒙時代に於ける悲觀的文化觀は、先づ有名なる蜜蜂物語に於て最も鋭く表現され、ルーソーの文化論に於て其の頂上に達した。

却說右に述べしが如き嚴密な個人主義に導ける多數の因素に對しては、カント前哲學の一特徴にして、夫れ自身に於ては人間社會のより正當なる把捉への途を開いたと思はれる所の其の自然

主義は、殆んど全く無力であつたので、其等の因素の勢力を抑制することは出来なかつたのであるが、今其の自然主義は精神的生活と物質的生活との對立に於て、後者を重要視することによりて、自然的事象の範域に於て既に發達せる嚴格なる法則性の表象を、精神的生活へも移さんとする傾向を本來具有せるものである。而して此の傾向はカント前哲學の實在主義的及び唯物主義的思潮に於て、最も著しく現はれたのであるが、更に同思潮内に於て人間心意生活の因果的考察は、主として二つの方針に於て發達した。即ち一は連合心理學の範域に於て、二は一定の精神物理學的考察の方針に於て發達した。而して連合心理學はヒュームに於て、既に啓蒙思想の終末を指示して居る。尙ほ連合心理學の創設者ハートレーも、既に同情の事實を連合心理學上から説明せんとする企だてに於て、社會心理學的考察への途を指示して居る。要するに連合心理學は啓蒙思想の產物であるが、しかも其の發達するにつれて人間の社會的性質を重要するに至り、夫れによりて啓蒙思想を征服する一つの途を準備したのである。然るに精神物理學の方針は、佛國唯物主義に於て到達せる其の最も發達せる形態に於て見るも、個人主義的思想圈を破壊する何等の傾向をも現示して居ない。吾人は佛國唯物主義者の思想界に於て、社會學的性質を有する何物をも見出さないものである。

尙ほ吾人は個人主義的啓蒙思想を、所々に於て破壊せんとする傾向を有する思想家を、既にル

ネサンス時代に於ても時々發見する。マキアヴェルリの如きは其の一例である。而して啓蒙時代に於ては、吾人はかゝる思想家として特にモンテスキューやライプニッツを挙げることが出来る。但し此等の思想家も尙ほ根本的には個人主義に囚へられて居たのである。

今啓蒙個人主義の破滅はカント哲學と密接に結び附いて居る。併し既にカント以前に又幾部分彼と相並び彼の哲學から獨立して、啓蒙個人主義の理論的前定を覆さんとする二潮流が現はれて居た。是れ啓蒙個人主義は、理論的方面に於ては心理學的考察の主知主義を其の強き支柱となすものであるが、然るに之れに對して二つの方針に於ける反對が可能であるからである。一は心意生活の中核を感情と見るものにして、二は之を意志と見るものである。而して右の二方針は第十八世紀の感情哲學、及びヘルデルより出發せる考察法に於て發展したのである。

感情哲學は貴族的及び民主的の二方針に於て發達した。前者を代表するものはハーマン(Hamann)にして、後者を代表するものはルソーである。但しルソーの感情哲學は只純否定的關係に於て、社會學的表象の發達上意味を有するだけである。是れ感情生活の偏局な強調は、社會的制度の壓迫に反抗する一の極端な個人主義と合致するからである。

ヘルデルから出發せる反啓蒙的思潮は、民族精神及び進化或は發達の二概念によりて、其特質を發揮するものである。ヘルデルは外國文學の生産物に對する感受性及び感應性の極めて大なる

ことによりて、啓蒙の非歴史的な考へ方を遙かに超出した。彼はまさしく民族精神の概念を發見し、而して夫れによりて精神生活の一方面、即ち其の過程の不隨意性及び衝動性の爲めに、個人の間に於て一般的一致を示し、又夫れ故に本來より正當なる社會學的表象の發達を導く傾向を有する方面に、學者の注意を向けさせた。更にヘルデルは進化或は發達思想を、其の因果的方面に於ても亦目的論的方面に於ても、人類の全歴史に適用したのである。但しヘルデルもまだ根本的には、啓蒙の思想圈を征服することが出来なかつた。

近世の第二時代はさきに述べし如く、カントによりて開始されたのである。カントの哲學は精神生活全體の範域に於ける如く、又社會學的思想の範域に於ても、一の深奥なる轉回點を示すものである。此處に余輩の目的上から見て、カントによりて誘導された哲學的思想の一般的變動を考察すると、之を左の五項に分つことが出来る。(1)先づカントは世界の考察に於ける從來の自然主義を、一の理想主義的或は觀念論的考へ方を以て取り代へた。(2)次に彼は規範的或は目的論的考へ方を、記述的或は因果的考へ方によりて、或は一層詳しく云へば、兩者の獨特な巧妙な結合によりて退けた。(3)次に彼は心意生活の理論に於て、主知主義を主意主義(Ethelismus)即ち意志を精神生活の中心に置く見地によりて退けた。(4)次に彼は進化思想或は發達思想を、歴史的生活の範域に於てよりは寧ろ有機的生活の範域に於て大に強調したので、而して其點に於ては

ヘルデルに劣つて居るが、しかも有機的生活に於てはヘルデルよりは一層概念的に明確に、又目的論的考へ方の混交によりて濁らされずに、之を強調した。(5) 終りに彼は從來の實體的考へ方を排して進動的考へ方を、殊に余輩が此處に問題とする範域、即ち精神生活の範域に於て重要視した。

是れカントの基本的な思想にして、而して此等の思想の展開は又社會心理學的思想の範域に於て、完全なる轉回を誘導せざるを得ざるものであつた。但しカント自身は此の轉回に参加しなかつた。精神生活の性質に關する彼自身の思想は、大部分は尙ほ啓蒙思想の埒内に動いて居た。カントは啓蒙の哲學的建築を土臺から破壊したのであるが、併し尙ほ多くの點に於て啓蒙思想の埒内に囚はれて居たのである。

此處に次の時代がカントの基本思想を大に發展させた仕事を詳しく述べる暇はないで、根本的には只之を左の問題の見地から考察するに止める。即ち此の際自然科学的考へ方は如何なる役目を演じたか、又嚴密に云ふ精神科學の範域其の物に於て、其の特有の補助手段によりて、如何程まで一層正當なる社會心理學的思想の發達が成就されたか。今合則性及び因果的結合の概念が、第十八世紀の終り以後始めて自然科学の範域から史學に入り込んだものなるを考へるならば、此處に何人も自然科学の影響の重大なることを、始めから疑はうとしないであらう。さはれ社會



心理學的思想の重大なる發達は、主として精神科學の範域其の物に於て、其の特有の補助手段によりて成就されたのである。此處に浪漫主義は殊に吾人の注意を惹く。而して其の意義を理解する爲めには吾人は只、法律の本質は一切の個人的恣意を脱する社會的なものであると見るザヴィーの說や、社會の個人主義的把握から個人は全體の利益に服従すべきものであると云ふ其の後の要求へのフィヒテの注目す可き轉移や、ヘーゲルの客觀的精神論などを憶ひ起すだけで充分であると思ふ。併し浪漫主義哲學の燦然たる發達は、記述的考へ方を排して規範的考へ方を偏重すると云ふ舊弊害に再び陷つたのである。

そこで浪漫主義の偏局なる見解は、又他の方面からの考察によりて退けられた。(もつとも夫れと同時に更に他種の新しき偏局な見解が入り込んで來たが。)要するに其の考察に於て意志殊に全體の不隨意的衝動的意志を重要視する浪漫主義の方針は、一定の關係に於て啓蒙思想を憶ひ起させる處の他の一方針によりて退けられたのである。而して其の方針が一部分個人主義的色彩を有し、一部分主知主義的色彩を有することは、之を啓蒙思想に逆戻りさせた。尙ほ同方針が大に法則性を強調して居ることは、明らかに自然科學の影響を指示するものである。而して此の點は同方針の或代表者が直接に自然科學に訴へて居る事を見れば更に明らかである。又他方から考ふれば、世界の偏局な自然科學的考へ方は、夫れ自身に於て個人主義的及び主知主義的考へ方へ

の一定の傾向を有つて居るのである。されば此の方針と啓蒙思想との結び付き及び自然科学的考へ方との結び付きは、本來相互依存的のものである。併し此の場合余輩は自然科学の影響は、第一次的な又根本的に決定的なものであると考へ得る。

此處に先づ第一にコントが擧げらる可きである。コントの歴史哲學に於ては、二つの基本思想が並行して居る。一は自然的環境及び經濟的關係が、歴史的生活の形成の上に及ぼす影響を強調するものにして、二は文化の發達が依て以て規定される其等の心理的因素の考察に於て、心意力の中で殊に知力が重んぜられることである。コント自身は彼の性質の分裂の故を以て、此等の基本思想を徹底的に發展させることが出来なかつた。又彼にありても、後には規範的見地が記述的見地を壓迫した。併し其等の基本思想の徹底的發達の一列が、彼の體系に結び附て居る。即ち其等二つの基本思想が相分離して發達することによりて、歴史哲學的考察の二つの方針が生起した。其の一は唯物主義的歴史哲學にして、マールクス派の大に發達させたもの、其の二は主知主義的歴史哲學にして、バックルの外にヘルバルトも亦幾部分リッペルトも、此の方針に屬するのである。而して個人主義は總て此等の人々の體系の一般的一特性（潜在的にせよ）となつて居る。今此の個人主義からの斷然たる一反轉は、ヘルバルトに結び附て行なはれた。吾人はヘルバルトに於て、自然科学的器械主義的考へ方と歴史的社會的考へ方との間の特異なる矛盾を見出

す。彼は心意生活の法則性を強調するに於て嚴格に自然科學の地盤に立つて居る。而して彼の心理學體系を支配する主知主義も亦同一の影響を指示する。更に彼の形而上學の粗大な個人主義も同様である。然るに彼の理論哲學の其等の諸學說に對して、彼の實際哲學は最も鋭き反對を現示する。彼の宗教哲學に於ては、神概念は只實際的要請としてのみ導入されて居る。而して彼の倫理學に於ては、一切の個人意志の服従する一の全體意志が設定され、而して現實的ではないが併し理想的な社會心が、之に應じて存立するものと考へられて居る。但し其の社會心は其の表現に於て個人心に類似するもの、即ち個々の表象が意識に於ける彼等の一切の結合に對すると同じ關係を、個人心が社會心に對して有するものと考へられて居る。而して個人主義的見解から全く正反對な見解への右の轉移は、甚だ突然である様に見えるが、併しヘルバルトの心理學には、此の如き全く正反對な見解を結び附けるに役立つ一點が含まれて居る。夫れは彼が全體的な心意生活に認める受働的性質である。夫れによりて個人心意生活の内部的統一是個々の表象の一層獨立な把捉を助長する様に抑制され、個々の表象に對して意識は云はゞ只一の空間を與へるのみで、其の中に於て個々の表象は相互に他に頓着せず動いて居る。ヘルバルトが個人意志の全體意志に對する關係を、個々の表象の個人的全體意識に對する關係に比したのは、決して偶然でない。ヘルバルトの見る處によれば、心意生活の統一は、常に一切の實體的性質を有しないの

みならず、更に一切の内容的及び本質的性質をも有せずして、一の純形式的意義を有するに止まるので、かくて此の見地からして、其の統一も矢張り只作用的な隨ふて本來形式的な性質を有するだけの全體意志を考へ出すことは、殊に容易であり、又何れにしても心意生活の統一に、より多くの意義を認める何れの他の見地から考へ出すよりも、遙かに容易であるのである。

其の後先づ精神的全體生活の性質に關する深奥なる理論的思想を完成せんと努めた人々は、ヘルバールトの哲學から出發して居る。ラッアルス及びシュエタインタールが千八百五十九年に「民族心理學及び言語學雜誌」を發行せし時には、ヘルバールトの哲學を基礎として居た。而して同雜誌第一卷の序論中に、民族心理學の基本思想は既に左の如く適切に論述されて居る。即ち全體は個人の總計よりもより多くのものであるので、かくて心意的全體生活の生産物も亦、單に個人的心理過程を加へ合すことによりて説明し得られるものでない。バスマヤンも亦、ヘルバールト哲學の影響を受けて、彼の民族心理學を建設したものと思はれる。而して彼の論述する處を見ると、全體の心理的生活及び其の生産物は甚だ強大なる勢力を有し、之れに對しては個人の獨立性は全く消失して居る、又個人は只全體に於てのみ其の起源を有する心理的過程に對する、單なる地盤に過ぎないものとなつて居る。彼の云ふ處によれば、個人が考へるのではなく、個人に於て考へられるのである。

其等の人々によりて代表されるヘルバールト派は、コントの歴史哲學及び夫れと近縁を有する諸方針、並に一般に自然科學的考へ方によりて大に影響されたる諸體系の個人主義に對して強大な反動を現示するが、併し同派は又反對の方向に於て同様な一偏見に陷つた。夫れは即ち全體の爲めに個人から總ての意義及び獨立性を剝奪したことである。而して社會心理學的思想に於て、此等の兩極端の中間に立つ思想は、他の方面から現はれて來た。夫れは社會階級鬭爭の概念を中心とする近世社會學である。近來殊にグムプロヴィクツ及びラツエンホーフアーによりて代表される近世社會學説は、個々の黨派或は社會階級を其の考察の中心に置いて居る。而して其の黨派或は社會階級と云ふは、夫れ自身に於て見れば本質的に同様に感じ、考へ、又其の目的及び努力に於て一致する衆個人から成立して、同質的一全體を表現するものであるが、併し國家内にありては相互に對して反對及び鬭爭の關係に立つものにして、かくて國家は一方に於ては強き黨派による弱き黨派の壓迫に基き、他方に於ては相爭ふ階級の妥協に基いて成立するものである。上に述べしラツアルスやバスチャンの思想に對して、此見解に認められる大なる進歩は、先づ第一に此の見解に於ては構成する諸要素と其の全體との關係は、最早單に合意及び同情の關係としてだけではなく、更に差異及び鬭爭の關係としても亦考へられて居ると云ふ點に於て、認められるのである。而して之れによりて構成要素は、さきにヘルバールトを基礎とする心理學的考察が剝奪

せる其の獨立性を、或度まで恢復した。但し此の見解に於ては構成要素として立てられて居るのは個人でなく、社會團體或は黨派であると云ふ點は、社會心理學的基本思想に對して根本的重要を有するよりは、寧ろ社會（ゲゼルシャツツレシ）論と稱せられる處の一層嚴密に形成されたる學科に對して事實的重要を有するものである。是れ此の學説は其の原本的形式に於ては、一般的に只其の内部に於て既に種々なる階級が發達せる其等の文化形體に對してのみ適合するものにして、一般的なる經濟的及び社會的平等が行なはれて居る處の、文化の最低階段にある不安定民族には適合しないからである。併し心理學的關係に於ては、其等の文化諸階段の間に毫も根本的な差別は存し得ない。されば此の社會學的學説の心理學的中核は、吾人が社會團體の地位に再び個人を置き、又個人を全體に對して單に服従の關係に置くのみならず、更に同時に之れに一定の獨立性を認めて考へる時に、始めて明らかに現はれるのである。グムプロヴィクツやラツエンホーフアーも亦、確かに其の心理學的考察に於て個人の獨立性を正當に認めて居ない。彼等はヘルバールト及び其の派の人々と同じく、個人を純受働的のものと考へて居る。只ヘルバールト一派の人々が個人の上に立ち之を支配するものは全體としての社會であると考へるに對して、彼等は夫れは社會諸團體であると考へる差異があるだけである。彼等の論ずる處によれば、社會生活を規定するものは只社會團體のみにして、個人ではないのである。

今此の關係に於て最後の階段に始めて到達したのはヴントである。ヴントは個人の二重性を大に強調した。彼の說によれば、個人は一方に於ては何處にありても一定の獨立性を保持するが、他方に於ては夫れと同時に、社會的要素として本來より大なる一全體中に没入する素質を具有して居る。而して社會學的階級鬭爭説は實に此の見解と一致するのみならず、此の見解によりて始めて深く心理學的に基礎附けられるのである。吾人若し個人を全く受働的な、總ての獨立性を缺く一要素として解するならば、かゝる要素から構成される團體が、如何にして他の團體に對する獨立性及び鬭爭能力を獲得するかは、全く理解し難くなると思はれる。社會團體の社會生活は、個人に於てまだ明らかに現はれない諸性質を發揮し得るものとするも、何處にも行はれる恒定性の原理は、少なくとも其等の諸性質の芽及び傾向が、既に個人に於て存在するものと前定することを要求する。されば一の社會團體は他の社會團體と、敵對の關係にも亦妥協及び連合の關係にも立ち得ると云ふ命題は、其の補充及び前定として、個人は既に全體の生活中に無意的に没入し得れば、又之れに對して獨立的態度をとり得ると云ふ命題を要求するのである。

無制限的個人主義も亦無制限的集團主義も、何れも一面の真理を含むが、併し全體としては真理でない。而して兩見解の含める真理を結合して立てられた右のヴントの見解は、全然正當であると思はれる。相爭ふ兩見解は人間の二重性の概念、即ち人間は一の獨立な實在物にして、又同

時により高き統一體の一要素をなすものであると云ふ見解に於て、完全に融和されると思はれるのである。

此處に更に現代の科學及び文學に於て、如何程まで人間の社會的性質の洞見が陽に又は陰に現はれて來たか或は現はれ始めたか、或は少なくとも此等の範域に於ける現象及び事實は、如何程まで適切なる社會學的表象に向ふて進んで居るかを簡單に考察して見よう。先づ現代の物理學に就て見るに、夫れは舊物理學に反して、益々純概念的及び抽象的性質をとり、自然事象の最後の根柢に關して直觀的表象を立てようとはしなくなつて居る。物體界の元子論的把握は單に一の可能に外ならずして、夫れと相並んで他の諸可能の存することが益々認められ、而して全體を其の要素の總計に均しと見る純器械的考へ方と相並んで、連續の表象は之れと同等な權利を有し、又個々の諸過程の内部的結合を一層強調する見地として現はれて居る。而して此處に生せる變動は、適切なる社會學的表象の發達に對して一層都合好き地盤を作つたことは明らかである。夫れは消極的には元子論的考へ方を退けると共に、又積極的には連續及びエネルギーの概念を導入し、而して夫れによりて考察が個々の要素よりも、より多く全體に向けられて來たのである。

併し社會學的思想の發達は、云ふまでもなく精神科學の發達によりて、遙かにより強く促進されて居る。先づ注目すべきは大量現象の統計學の意義である。夫れは本來總ての個人主義的考へ



方に對して、最も鋭き反對を意味するものである。又犯罪學に於て犯罪の原因として、個人的性質よりも社會的關係を重要視する傾向の發達せることも、注意す可きである。更に國家學及び經濟學の範域に於ては、個人主義的考へ方から社會主義的考へ方への轉移が行なはれて居ることは、大に注目す可きである。而して現代の社會科學に於て認められる右の變動或は傾向と同様なものが、現代の歴史科學に於ても明らかに認められ、更に現代の藝術及び文學に於ても明白に現はれて居るのである。

終りに現代の哲學的世界觀に於ける社會心理學的思想の影響を考察して見よう。夫れ現代の哲學に於て重大なる變動の行はれて居ることは何人も疑ふまい。而して此の變動に於ては、先づルネサンス以來自然考察の範域を征服せる其の學的考へ方が、精神生活の考察に於ても亦支配權を獲得し、精神科學の範域に於て今尙ほ教養ある多數の人々の間にも行なはれて居る素朴的な考へ方を押し退けるであらう。但し其の素朴的な考へ方と云ふは、一部分は神話的な、一部分は實體的な考へ方である。次に精神生活の學的考へ方は、偏局な規範的考へ方を、主として記述的な考へ方によりて取り代へねばならないであらう。此處に爰除さる可き偏局な規範的考へ方の弊害は、三種に大別される。第一種の弊害は、確實なる事實に於ける必要なる基礎を缺ける、隨ふて無効なる規範及び理想を設定することに於て現はれて居る。第二種の弊害は、偏局な規範的考へ

方に於ては、事實と理想とが混同され易いが爲めに、事實が曲解されると云ふことに存する。第三種の弊害は、事實の認識と同じく人間生活現象の價值判斷も亦、規範的見地が記述的見地を壓迫することによりて濁されると云ふことに存する。

尙ほ第三種の弊害に於ては、注意して區別されねばならない二つの範域が混同されて居る。即ち社會生活の形式と其の倫理的及び審美的内容とが混同されて居る。

（此處にフイアカント氏が社會生活のことは、後の同氏の社會學論から見て注意すべき點がある。）今社會生活の一切の形式は始めは、慣習即ち個人に對して強制的勢力を

有し、確乎たる規範として個人の生活を規定する慣習の形で現はれて居る。併し慣習の内容は始めから單に又主として審美的及び倫理的欲求によりて規定されて居るのでなく、其の外に又始めは主として實際的欲求によりて規定されて居る。各慣習は一定の倫理的内容を有つて居るが、併し其の始源及び存續に於て尙ほ他の諸要素が加はつて居るのである。かくて精神生活現象の考察に於て、只理想的なる倫理的或は審美的内容のみを主眼とする偏局な規範的考へ方は、二重の危險に陷る恐れがある。一方に於ては此の考へ方は精神生活現象の考察に於て、あまりに其の理想的内容を重要視して、他の諸要素を看過し易い、又他の諸要素をも理想的意義の光りに照らして見ることによりて、其等の現象をあまりに高く評價する恐れがある。他方に於ては倫理的要素が完全に實現され得ない爲めに、此の考へ方は一切の社會的形式に含まれて居る事實的内容を、理

想的要素に比して無視し易い。つまりあまり多く要求することによりて、其等の現象をあまりに低く評價し易いのである。

精神科學の視界が、歐洲文化人民の範域を越へて全地球上に擴められて以來、一切の倫理的及び審美的欲求が充足される一切の特殊の形式の相對的價值は疑はれない事實となつた。倫理的及び審美的欲求は一切の人民に於て、最低の文化階段にあるものに於ても發動して居る。只其の充足の仕方が甚だ異なつて居るだけである。而して個々の場合に於て規範として價值を有するものと、只純心理學的意義を有するものとが混合して居るが、吾人は只規範の見地と記述の見地とを嚴格に分離して考察することによりてのみ、兩者を判然區別し得るのである。規範の見地の偏重は、文化の精神的財は或度まで其の選べる形式から獨立するものなるを認識することを、常に不可能ならしめるのである。

却説右に述べしが如き、諸民族の精神生活の純記述的及び學的考へ方に於ては、云ふまでもなく因果性及び合則性の概念が常に其の中心に置かれるのであるが、今之れに對して法則の概念に結び附く幾多の疑問が直ちに呈出されてくる。是れかゝる疑問を起す人々は法則を以て自然科學の土地で生長せる一產物と認め、而して夫れは精神科學の範域に移される可きものでないかと考へるからである。併し因果性及び合則の概念に對するかゝる考へは、二つの謬見に基因するもので

ある。第一には其等の人々は狹義及び最狹義の法則の概念と合則性（Gesetzmassigkeit）の概念、即ち因果的に結合されたる現象の屢起的反復及び類型的出現の概念とを混同して居る。（但し是れはヴントが經驗的法則と自然法則との別として説いて居るものである。）而して此處に先づ第一に人々を謬見に導くものは、無例外性（die Ausnahmlosigkeit）の思想である。云ふまでもなく、甚だ複合的な精神生活の事實の分析は、決して無例外の高さにまで上り得ないであらう。併し自然科學的考察の範域に於ても、只最狹義の自然法則のみが、即ち現象の分析が最後の要素にまで進入する場合のみが、其の無例外性の高さに到達するだけである。殊に自然科學の有機的學科は一般には經驗的法則以上に達しない。而して此處に既に現象の甚大なる複合性が、無例外的に適當する法則の發見を困難ならしめるとすれば、非常に複雑なる精神生活の現象に於て、かゝる法則の發見され難きことは寧ろ當然である。法則の特質を因果的結合に於てはなく、無例外性に於て求めんとするのは、夫れはつまり自然科學をあまりに偏重して法則を考へる弊である。因果的結合の發見は總ての學的考へ方の願望する處にして、而して精神科學によりても亦既に屢々遂成されたことである。尙ほ精神科學にありても、屢々反復する形式が取扱はれる處では、因果的結合は自から現象及び過程の類型的の設定に導くのであるが、其の類型的の概念は既に一定の合則性の認識を含むものである。確かに精神科學に於ける因果的考察は、自然科學の比較的單純なる

關係に於けるとは異なり、單純なる因果の概念を以てよりは寧ろ相互作用 (Wechselwirkung) の概念を以て行なはねばならぬ。個人の生活と其の社會的環境との關係、偉人と時代との關係、全體の社會的生産物の形態と内部的心理過程との關係、此等は總て只吾人が常に相互作用の概念を適用する時にのみ、認識され得るのである。されば相互作用の概念は、物理學或は化學の範域に於て單純なる因果の概念が演ずると同一の中心的役目を、精神科學に於て演ずるのである。

（此處にフイアカント氏が精神科學に於て相互作用の概念の演ずる役目の重大なるを説いて居ることは、後の同氏の社會學論上から見て注意すべき點である。尙ほ同氏は夫れより現代の哲學的世界形像の理想主義的性質や、又是れまで論じ來れるが如き、人間精神生活の組織的考察が實際的生活上に及ぼす影響などを論述して居るが夫れは本論文の主旨から見ても別に肝要でないから省略して置く。）

却説「自然人民と文化人民」の第一章「社會心理學的表象の發達」の大意は、以上述べしが如きものであるが、吾人は之れによりてフイアカント氏は始めから社會學的研究に大に興味を有して居たこと、及び同氏は始めから既に一定の社會學論を立て、居たことを學ぶのである。而して其の社會學論に於て、同氏の今日の社會學論の幾多の根本思想の萌芽が發見されるのである。

夫れ同氏は上に述べし如く、本書中社會學とか社會學的とか云ふ語を屢々用ひられ、尙ほ又一層屢々社會心理學とか社會心理學的とか云ふ語を用ひられて居るので、更に本書の副題目は「社會心理學への一貢獻」となつて居り、又第一章は「社會心理學的表象の發達」と題されて居るのであるが、然らば同氏は本書に於て社會學及び社會心理學を如何なる學問と解し、又兩者の關係を

如何に考へて居るか云ふに、同氏は本書中何處に於ても社會學の一般的概念も亦社會心理學の一般的概念も説述して居ない。隨ふて兩者の概念的關係も論述して居ない。それで吾人は同氏が其等の語を用ひられて居る場合を吟味して、之を推察するより外に途はない。而して最も屢々其等の語を用ひられて居るのは、本書第一章であるから、上に述べし本章の大要から考へて、吾人は同氏は始め社會學及び社會心理學を如何なるものと見て居たかを、大體上推察することが出来ると思ふ。

要するにフイアカント氏が本書中、社會學的思想とか社會心理學的思想とか云ふは、先づ廣義に於ては個人と社會或は全體との關係に關する思想、又特に其の心理學的思想を意味して居ると思はれる。例へば社會或は全體に對して個人を偏重する思想即ち個人主義的思想や、個人に對して社會或は全體を偏重する思想即ち集團主義的思想や、又社會或は全體と個人との關係に於て、個人は全體に屬すると同時に、又夫れ自身獨立性及び特有の意義を有するものと見る思想等は、即ち同氏が社會學的或は社會心理學的思想と稱して居るものである。而して是れによりて察すると、同氏が社會學或は社會心理學と云ふのは、つまり社會或は全體と個人との關係を研究する學、少なくとも此の問題を中心として社會現象及び文化現象を研究する學となる。

併しフイアカント氏は又社會學的或は社會心理學的思想を、右の意味よりも狭い意味に解され

て居る場合がある。而して其等の場合に就て考へると、社會學的或は社會心理學的思想と云ふは、つまり個人主義に對して人間の社會的性質を承認し、之を強調する思想、隨ふて又主知主義に對して主意主義を唱へる思想を意味するものと思はれる。かくて社會學或は社會心理學とは、つまり特に人間の社會的性質を重要視して、個人と社會或は全體との關係を考究する學、少なくとも人間の社會的性質を重要視する見地からして、社會現象及び文化現象を研究する學となる。

フィアカント氏は社會學或は社會心理學の一般的概念を、右の如くに簡明に説述して居るのでないが、併し同氏が社會學的或は社會心理學的思想と稱するものを詳しく吟味して推察すると、大體上同氏の社會學或は社會心理學の一般的概念は、右に述べし如くに規定さる可きものと思はれるのである。然らば同氏は社會學と社會心理學との關係を如何に考へて居たか。同氏は本書中社會學的及び社會心理學的と云ふ語を、殆んど無差別に用ひられて居ると思はれる。而して其の點から考へると同氏は社會學と社會心理學とを同一視されて居る様に察しられる。併し他の場合を考へ合せて見ると、恐らくは同氏の眞意は社會心理學は社會學の中心的部門或は社會學の中心的部門は社會心理學的なものと思はれる。そうして見ると、同氏は始めから社會學に對して大體上余輩と同様な考へを抱いて居たと云ひ得られるのである。而して同氏が後にジム

メルの社會學概念を受け容れた因縁は、先づ其の點に於て認められると思ふ。

ファイアカント氏が「自然人民と文化人民」、殊に其の第一章に於て論述されて居ることから推究すると、同氏の最初の社會學及び社會心理學の一般的概念は、大體上右に述べしが如きものであつたと考へられるが、次に同書中殊に同章中に論述されて居る學問論上の見解から、同氏の社會學方法論を引き出して見ると、其の中に今日の同氏の社會學方法論の幾多の根本思想或は少くも其の萌芽が、見出されるのである。

此處にファイアカント氏は先づ一切の精神科學隨ふて又社會學も、之を経験科學として發達させる必要を主張して居る。而して主知主義、實體的考へ方、目的論的或は規範的考へ方等を排して、主意主義、作用的或は機能的考へ方、因果的或は記述的考へ方等を主張して居る。又精神科學に於て人間の社會的性質或は社會的本能を重要視する必要を唱へて居る。而して此等の學問論的見解は、後の同氏の社會學論の根本思想となつて居るものである。更に本書中さきに述べし如く、同氏は既に社會生活の形式と内容を區別して考究する必要を認め、又精神科學に於ける相互作用の概念の中心的重要を説いて居る。かくて後に同氏がジムメルの社會學概念を受け容れて展開せる同氏の社會學論、即ち社會學を経験的に研究される特殊科學にして、而して社會形式を對象とする純正社會學と見る社會學論の根本思想の萌芽は、既に同氏の最初の著作たる「自然



民と文化人民」の中に見出されるのである。されば吾人は同氏が後に何人よりも先きにジムメルの社會學概念を承認し、大に之を展開せんと努力するに至れるは、決して怪むに足らないので、其の因縁は同氏の最初の著作中に既に存在するを覺るのである。但しジムメルが其の社會學概念を始めて簡単に論述せる論文「社會學の問題」は、本書に先だち千八百九十四年シュモラー年報中に公にされて居るが、併しフイアカント氏が本書を著述する際まだ之を知らなかつたことは、本書中多くの社會學の名や著作論文が挙げられて居るに拘らず、ジムメルの右の論文の挙げられて居ないのを見て察知することが出来る。尙ほ又フイアカント氏が、今日の同氏の社會學論に於て大に重要視されて居る現象學的方法の思想は、本書中には全く現はれて居ないが、是れ本書の公にされし頃には、まだフッサールの「論理學的研究」(Logische Untersuchungen)をへ現はれて居なかつたので、今日喧傳されるが如き現象學の概念は、小數の一部の哲學者以外には知られて居なかつたからである。

以上述べし處によりて見れば、フイアカント氏の今日の最とも圓熟せる社會學論の主要思想、即ち經驗的に研究される特殊學としての社會學の概念、社會化の形式を對象とするものとしての「純正社會學」或は「形式社會學」或は「一般社會學」の概念、及び現象學的方法を重要視する思想中、先づ第一の思想は同氏の最初的好著作「自然人民と文化人民」の中に、明らかに認められる。

同氏は始めから大體上社會學は經驗的に研究される特殊學であると考へて居たと思はれる。而して第二の主要思想に就ては、同書中同氏は既に社會生活の形式と内容との區別に注意して居るが、併し其の社會生活の形式と云ふは、後に同氏がジムメルから學んだ社會化の形式の概念の如く、嚴密に精練されたものでない。隨ふて同書に於ては同氏は社會學の對象は社會化の形式であると云ふ思想には、まだ達して居ないと思はれる。而して其の後の著書及び論文に於て、フイアカント氏は先づ第一の主要思想を愈々確立し、次に第二の主要思想を明らかに確立し、最後に輓近に至りて第三の主要思想即ち現象學的方法を重要視する思想を確立して、以て同氏の社會學論を大成したのである。是れより右の順序を追ふて同氏の社會學論の發達を考究することゝする。